



Title	共生学コロキウム「分断と対立を超えて：激動する国際社会と人間・環境・未来」開催報告
Author(s)	佐伯, いく代; 坂口, 真康; 徳永, 恵美香 他
Citation	未来共創. 2026, 13, p. 31-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106423
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

共生学コロキウム「分断と対立を超えて ―激動する国際社会と人間・環境・未来―」開催報告

佐伯 いく代

大阪大学大学院 人間科学研究科

坂口 真康

大阪大学大学院 人間科学研究科

徳永 恵美香

大阪大学大学院 人間科学研究科 附属未来共創センター

上野 隆弘

大阪大学大学院 人間科学研究科 附属未来共創センター

要旨

2025 年 10 月、大阪大学にて「分断と対立を超えて―激動する国際社会と人間・環境・未来―」と題する研究会が開催された。この会ではまず、外務省参与・地球環境問題担当大使として国際交渉の実務に関わられてきた堀江正彦氏に「気候変動に関する国連外交交渉～現下の世界情勢において何が求められるのか?」というタイトルでお話をいただいた。ここでは堀江氏が実際に関わられた京都議定書からパリ協定採択に至るまでの交渉の過程などが紹介された。次に、被爆樹木の保全を通じて平和活動を進められている鈴木雅和氏に「被爆樹木の生存戦略と人類の未来」という講演をいただいた。鈴木氏は、ご自身が撮影された被爆樹木の写真とともに、保全の意義や今後の展望などについて意見を述べられた。質疑応答では、環境問題や国際平和といった地球規模の課題に対し、私たちはどのように考え、行動すべきかという点について議論が交わされた。

saeki.hus@osaka-u.ac.jp (佐伯), sakaguchi.masayasu.hus@osaka-u.ac.jp (坂口), tokunaga.emika.hus@osaka-u.ac.jp (徳永), ueno.takahiro.hus@osaka-u.ac.jp (上野)

1. はじめに

2016年4月、大阪大学人間科学部に共生学系という新しい研究・教育組織が誕生した。この組織の目的は、人が「共に生きる」とはどのようなことか、専門領域の垣根を越え、学際的な視点から探求を行うことである。共生学が特に重んじているのは、現状を記述するだけではなく、それが生じた要因や動向について分析を行い、共に生きるという目標に向けて実践を深めていくことである。このアプローチは、「理念と価値観（フィロソフィー）」、「科学（サイエンス）」、「実践の技術（アート）」という三つのステップとして表現され、設立から約10年を経た今、様々な活動が展開されている¹。

共生学が扱うテーマの一つに、人と環境との共生—すなわち「環境共生」がある。気候変動や生物多様性の減少、海洋汚染といった地球規模の環境問題は年々深刻さを増しており、各国が協調して問題解決にあたることが求められている。一方で、テレビ、ラジオ、インターネットなどでは連日、「国際紛争」や「自国中心主義」といったキーワードがとびかい、私たちは本当に共に生きることができるのか、大きな問いを突き付けられている。

そのような状況にかんがみ、2025年10月15日に筆者らは「分断と対立を超えて—激動する国際社会と人間・環境・未来—」という研究会を開催した(図1)。これは、共生学コロキウムというシンポジウム形式の公開セミナーとして実施した。コロキウム(colloquium)とは、ラテン語で「対話・討論」を意味し、特定のテーマに関心をもつ人々が集い、意見を交換しあう場のことをさす。共生学コロキウムは、共生学分野が発足してから断続的に開催されているセミナーで、今回で17回目を迎える²。共生学のアプローチに照らすのであれば、今回のコロキウムの目的は、国際社会で起こっている問題について現状を把握し、分断と対立を超えるために必要な共生の理念や価値観を考え、未来に向けた行動実践について議論することである。

今回のコロキウムには、お二人の専門家をお呼びした。お一人目は堀江正彦氏である。堀江氏は、長く外交官として活躍され、地球環境問題担当大使として、国際交渉の実務に関わられてきた方である。堀江氏には、「気候変動に関する国連外交交渉～現下の世界情勢において何が求められるのか?」とい

OCTOBER

15

第 17 回 共生学コロキウム

The 17th Kyosei Studies Colloquium

2025 年 10 月 15 日 (水) 17:00～19:00
大阪大学大学院 人間科学研究科 本館 5F 51 教室(キャノピーホール)



分断と対立を超えて

— 激動する国際社会と人間・環境・未来 —

講演 1 堀江正彦 元外務省参与・地球環境問題担当大使
「気候変動に関する国連外交交渉
～現下の世界情勢において何が求められるのか?～」

地球温暖化に対処するため、国連気候変動枠組条約の下で「京都議定書」に続いて「パリ協定」が採択され、国際的な取り組みが進行している。しかしながら、トランプ大統領の登場によって、暗雲が立ち込めてきている。講演では、京都議定書に続いて「パリ協定」の採択に至った歴史的経緯と雄大な外交交渉の実態に関して説明し、現下の情勢において何が求められるかについて、皆さんと考えてみたい。





講演 2 鈴木雅和 筑波大学名誉教授
「被爆樹木の生存戦略と人類の未来」

私の専門は造園学ですが、2009 年に偶然、広島と長崎の被爆樹木の研究をはじめました。退職した年に科学研究費「広島市・長崎市における被爆樹木の保全活用に関する環境政策上の現状と課題」が採択されました。これまでの研究と活動の経過を、被爆樹木から人類に向けたメッセージ「核兵器使用の悪かさ」として、みなさんに選択するつもりでご紹介したいと思います。

主催：大阪大学大学院人間科学研究科共生学系
共催：大阪大学大学院 附属未来共創センター
コーディネーター：佐伯いく代（環境共生学分野）& 坂口真康（国際協力学分野）
問い合わせ先：saeiki.hus@osaka-u.ac.jp

事前申し込みは不要です。オンライン参加を希望される方は右記の QR コードからお申込みください。（締切：10 月 14 日（火））






図1 開催ポスター。写真は、広島市の平和記念公園のクスノキ。会場となった人間科学部5階講義棟「キャノピーホール」になぞらえ、樹冠(キャノピー)の写真を挿入した。

うタイトルで、地球規模課題に対する国際協調のあり方についてお話をいただくこととした。堀江氏は、大阪大学のご出身ということもあり、ご多忙の中、快く講演をお引き受けいただいた。お二人目の講演者は、鈴木雅和氏である。鈴木氏は環境デザイン学および造園学を専門とされ、東京大学、筑波

大学などで教鞭をとられたランドスケープアーキテクトである。これまでに、都市域の緑地デザインや、筑波山の梅林の再生プロジェクトなどを手掛けられ、日本造園学会賞、同学会上原敬二賞などを受賞されている。鈴木氏は筑波大学在任中、写真撮影のため広島を訪問した際、被爆樹木の強烈なインパクトに心をうたれ、その保全を通じた平和活動をはじめられた。当日は本学の会場にお越しいただくご予定であったが、直前に緊急入院をされる事態にみまわれた。幸い大事に至らず、鈴木氏のご厚意にて、オンラインでお話をいただけることとなった。この企画は、共生学系に所属する佐伯いく代(環境共生学分野)と坂口真康(国際協力学分野)が共同で計画し、未来共創センターに所属する徳永恵美香と上野隆弘が運営と記録を担当した。本稿では、堀江氏および鈴木氏の講演および質疑応答の様子などを紹介する。

2. 講演概要

講演1 気候変動に関する国連外交交渉 ～現下の世界情勢において何が求められるのか?」(堀江正彦氏)

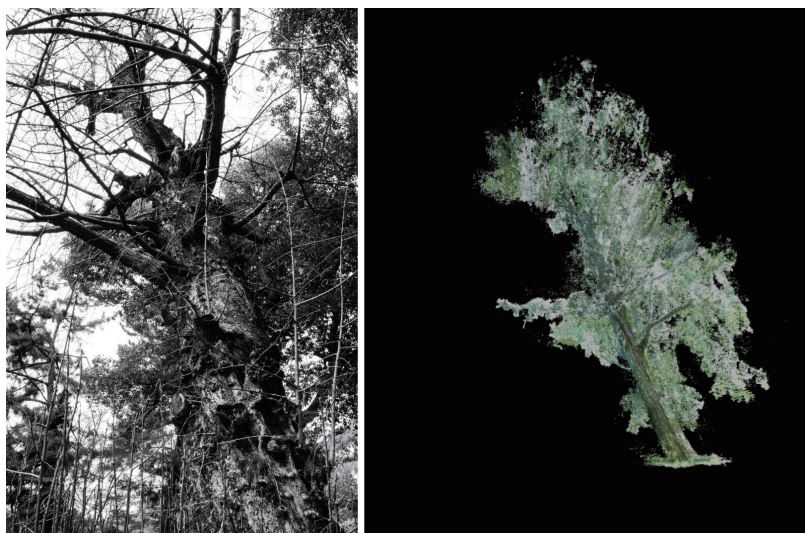


図2 堀江氏の講演の様子

本講演は、その案内文において、「講演では、京都議定書に続いてパリ協定の採択に至った歴史的経緯と熾烈な外交交渉の実態に関して説明し、現下の情勢において何が求められるかについて、皆さんと考えてみたい」と記載のとおり、国際社会における環境問題への取組について、当日の参加者との質疑応答を通じた議論も含む形で進められた(図2)。まず、堀江氏が外交官時代のご自身の経歴を世界地図とともにご紹介くださり、実にたくさんの国々をまわられながら業務をされてこられたことをお聞きした。次に、今回のコロナウムのテーマである「分断と対立」について、国際情勢をもとに4つの事例が説明された。1つ目は、国連憲章(主権平等、武力不行使、人権尊重)に対するロシア・イスラエルの挑戦、2つ目は市場主義的資本主義と権威主義的資本主義の対立、3つ目は外国人との共生社会構築と外国人排斥主義との軋轢、4つ目は気候変動危機と生物多様性喪失危機に関する各国、とりわけアメリカ合衆国(以下、米国)のドナルド・トランプ政権に起因する主張の違いについてである。最初の3つは、人と人との対立であるのに対し、4つ目は人と自然との対立でもあることが言及され、講演のテーマである「気候変動問題」について、国際的取組の経緯などを解説いただいた。講演の後半では、堀江氏が実際に関わられた京都議定書からパリ協定採択に至るまでの交渉の過程などが具体的なエピソードとともに取り上げられた。例えば、国際連合気候変動枠組条約第21回締約国会議(COP21)におけるフランス共和国の外交戦略に関する話題の中では、総会でニカラグア共和国の代表が「気候正義」を主張しつつ反対の挙手をしていた中、フランス共和国の議長がそれを無視して採択した出来事などが共有された。総じて、講演1では人間と環境との共生の議論とともに、国際社会における人間同士の共生の議論の重要性も確認されたといえる。

講演2 被爆樹木の生存戦略と人類の未来(鈴木雅和氏)

本講演では、平和記念公園のアオギリなどの多数の被爆樹木の写真(図3)をご紹介いただくとともに、鈴木氏の自己紹介と研究に至った経緯の説明や、被爆樹木の生存意義と生存戦略に学ぶことの重要性についてお話しいただいた。鈴木氏と被爆樹木との初めての出会いは2009年3月29日。爆心から1,370m



左：広島市縮景園で2009年に撮影した被爆イチョウ 右：同左イチョウを地上レーザ測量機（TLS）により3D撮影
被爆樹木との最初の出会ひ 撮影：鈴木雅和 東京農業大学 國井洋一教授研究室と共同制作

図3 広島市内にある被爆樹木（鈴木雅和氏提供）

にある広島の名園「縮景園」のイチョウを見て、幹に残るケロイドや奇妙な枝の出方、無数に出るひこばえに強い衝撃を受けたという。鈴木氏は、この経験から広島の被爆樹木の写真を撮り始め、デジタルで写真の補正をしているときに被爆樹木が傾斜していることに初めて気づいた。同氏は、「その頃には、私の頭の中には広島市の地図ができていて、なぜか多くが爆心地に傾いているという気がした」と話し、その瞬間から被爆樹木研究が始まったと語った。

被爆樹木とは、爆心地から2km範囲にある、一般の人が観察できる痕跡を残した樹木であるとされている。広島市と長崎市には独自の被爆樹木認定基準があるが、広島市で159本、長崎市50本が認定されている。樹種としてはクスノキが最も多く、クロガネモチやシダレヤナギ、エノキ、イチョウなど約20種類がある。また、被爆樹木の症例には、(1)火傷・炭化・ケロイド・爆風による傷、(2)うろ・形成層の巻き込み、(3)幹の縦の亀裂・形成層の巻き込み、(4)爆心地反対側の根の伸長、(5)爆心地側の幹の扁平化・くぼみ、(6)多

数のひこばえ、(7) 地上部消失後の株立ち、(8) 爆心地側への傾斜、(9) 樹形異常・枝ぶりの異常、がある。鈴木氏は、樹木が原爆によってこれだけの被害を受けたのであれば、人間ならどれほどひどい被害を受けたらうか、この横にいたらどうなったのだろうか、という想像力が必要だと指摘し、「木が感じた閃光、熱、爆風、爆音、その後に見た光景、聞いた声、嗅いだ匂い、それらを私たちが呼び起こすことが重要」と強調した。

鈴木氏は、さらに被爆樹木の生存意義と生存戦略について次のように述べた。移植されて保存されている被爆樹木は移植してまで残そうという市民の意図が込められており、被爆前から同じ場所で生き続けている被爆樹木は街の復興によって急速に変化した周辺環境の中で街と同化して生きている。中でも半径2kmに散在する被爆樹木は、今は見るできない爆心地に向かって一斉に傾斜していることから、樹木一本一本を見ただけではわからない集団的な現象を足でめぐることで、まちのスケールで原爆の被害を感じることができる。ある意味で、広島と長崎は原爆被害のフィールド・ミュージアムであり、被爆建物と被爆樹木は被爆の証拠として守り続けるべきだと強調した。

3. 質疑と討論

講演の後、質疑と討論が行われた。まず、参加者から、堀江氏に対し、気候変動の問題は大変重要だが、二酸化炭素の吸収源である森林の保護について、J-クレジットなどの国内施策の仕組みが複雑すぎるのではという問題提起がなされた。これについて堀江氏からは、地球環境問題が危機的な状況にあり、先日、国連事務総長が「地球沸騰」という表現を用いたことを紹介し、みなでできるだけ包括的な取組を進めていく必要があることが述べられた。しかし、気候変動は豪雨災害の要因であるものの、それがどのように関わっているのかを即座に証明することは難しく、報道などでの言及が限定的にならざるをえないという課題がとりあげられた。森林については重要な吸収源であるため世界規模で森林面積を減少させない取組が必要であること、また、二酸化炭素の吸収だけでなく、水源涵養や土砂流出の防止など、多面的な機能がある点も重視すべきというお答えであった。

次に、鈴木氏に対して参加者から、実際に広島原爆資料館を訪れたとき、戦争の科学的な側面と悲惨な歴史に象徴される悲劇性とをうまくつなげることができない自分があり、被爆樹木の役割についてその点から意見を伺いたいという質問があった。鈴木氏は、大変重要な指摘であり、ご自身もその点で悩まれていると話された。また悲惨な現実と将来像とを一つの施設で表現することには難しさがあり、原爆資料館は事実や悲惨さを伝える場として大切に、未来に向けてどう行動するのかについては別の施設で発信するのがよいのではないかという考えが紹介された。さらに鈴木氏は、「被爆樹木は自分では語らない。人が勉強し、想像し、問う努力が必要であり、すぐにわからないことに意義がある。」と述べられた。むしろ、最初から答えを聞こうとして、いろいろな展示を見るよりも、今までのことに疑いをもって問いかけることが大切という見解を表明された。

次の質問は、米国のドナルド・トランプ大統領のように、国際会議などで自国の利益や気候変動対策への反対意見などを主張するリーダーに対し、日本外交はどうあるべきかというものであった。堀江氏は、米国自身が国内で分断化されていると述べ、米国にも気候変動対策について努力を続けるといっている自治体や民間団体が多数あることに言及された。自国第一主義のリーダーには、みなで力をあわせて対処することが必要であり、地球益を優先することや、日本として国際協力を進めていくことへの市民の支持の重要性を指摘した。加えて、若者に環境の大切さを知ってもらう教育が必要であり、あなたたち学生ひとりひとりが輪を広げてほしいというメッセージが投げかけられた。

この後大阪大学大学院人間科学研究科の三好恵真子教授（環境行動学分野）とモハーチ・ゲルゲイ教授（環境共生学分野）から総括コメントをいただいた。三好教授は本学のカーボンニュートラル連携機構にも所属され、地域や生活に関わる環境問題の解決に向けて活動を進められている。堀江氏の講演については、京都議定書からパリ協定にいたる際、いかに外交的な努力がなされていたかについて言及され、（排出量削減の）数値目標だけでなくソフト・ハードの両面から協力をしていくことや、大学として、イノベーション・技術開発でも貢献する重要性などをお話しされた。三好教授の研究室は長崎や沖縄

等において戦争体験の記憶の継承に関するフィールドワークも重ねている。鈴木氏の講演については、長崎の平和案内人から伺った被爆樹木の生命力と重ねつつ、今日の講演から学んだことを刺激とし、未来のために実り多いものにしていくことが大切とのお話をいただいた。

モハーチ教授からは、平和であることの意味を問いかけるコメントがなされた。戦争は誰にとっても悪であるといえるが、平和な社会になった際、それによって経済活動が活発化し、森などの環境が破壊され、みどりが全くないうちになってしまうことがある。平和が望ましくない、ということを言いたいのではなく、真の平和の意味を問い、平和なときに立ち上がる問いに耳を傾けてほしい、という趣旨の発言があった。

本コロキウムには、会場、オンラインをあわせて55名の方に参加をいただいた。うち15名は、学外からの一般参加であった。講演後、参加者より任意で感想を提出いただいた。2名の学生の感想を紹介する。

- 堀江先生のご講演では、気候変動に関する実態を改めて学ぶことができ、京都議定書の採択に際する実態を知ることができました。現在も不安定な世界情勢の中で、人と人の対立だけでなく、地球規模での人と自然環境との対立→共生を考えていかなければならないと改めて思いました。また、気候正義の観点からも貧困地域や将来の世代への不公平さをいかに正すことができるのか考える必要があると感じました。鈴木先生のご講演では、被曝したのは人間だけではなく、植物もそうであるということに気づかされました。これから被曝樹木が平和のためのシンボリックな存在になっていく可能性に期待をしたいと思います。(大学院博士前期課程2年生)
- 堀江先生の講義は、よく知っている地球環境への対処の国際的な動きを、実際に内幕にいた方から直接お聞きできたことに大きな価値を感じました。パリ協定採択までの教科書では習わない詳細な動きと、現場の空気感を追体験できたことはとても意義深い経験になりました。鈴木先生の講義は、わたしにとってとても新鮮で、考えさせられる内容でした。核

兵器という科学技術が、以後80年、またそのさきも、植物を如実に変形し、そのまの姿で生きを強いる様は、堀江先生の講義と重なり、私には人新世という時代の象徴のように思えました。環境問題は、戦争から時が経ち再び惑星規模の大きな物語を私たちに突きつける課題ですが、そこに取り組んでいく前に、被爆樹木のような人の情念こもる遺産に目を向けることは、人新世に適応し、立ち向かううえで重要な示唆を得られると考えました。(学部4年生)

4. まとめ

お二人の講演は、「環境共生」の観点から多くの共通点を有していた一方で、掘って立つ観点が異なるという差異点を有していたと捉えられる。堀江氏の講演では国際的な観点から、鈴木氏の講演では草の根の観点からの人間と環境の議論が展開されたと整理することができるだろう。視点がマクロかミクロかという点で両講演は異なる位相の議論ではあったが、人間と環境との共生を議論する際に、人と人との共生の議論は切っても切れないことが提示されたという共通点を有している。象徴的なエピソードとしては、例えば、講演1ではパリ協定採択の最中にニカラグア共和国の代表から「気候正義」が主張される中でフランス共和国の議長が採択を行ったというエピソードが、講演2では被爆樹木を御神木として保存するという動きの中で、同樹木を見ると原子爆弾のことを思い出すことから反対をした人々がいたというエピソードが挙げられる。

それでは、多様な価値観を有する人々の間に生じ得るコンフリクトを抱えながらも、全ての人が共通で生きている地球の存続を考え続けるために考慮する必要がある要素とは何であろうか。その点について、国民国家という枠組にとらわれずにグローバルな視点から探究し続けることが、今後とも人間と環境ならびに人と人との共生を議論していく上で肝要になると思われる。

環境問題と国際平和は、一見、重なるの小さな異分野のテーマに聞こえるかもしれない。しかし両者には強い関連性がある。第一に、健全で暮らしやすい環境がなければ人は生きていくことができない。逆に人が良好な環境や

資源を求めることにより、紛争が起こる可能性もある。私たちが自然環境に気を配り、賢明かつ持続的に利用することは、限りある資源や土地をめぐる軋轢（コンフリクト）を避けるためにも必要な実践である。第二に、気候変動や生物多様性の喪失といった地球規模の環境問題は、平和でなければ解決をすることが不可能である。ウクライナやガザのように自己の生死が眼前にせまっているような場においては、生存や安全が何にもまして重要であり、持続可能性について考えることは著しく困難である。最後に、気候変動も国際紛争も、個人の努力のみで解決できるものではない。コミュニティ、地域、国家の垣根を越え、異なる立場の人々が対話・協働して解決にあたる必要がある。鈴木氏は講演の最後に、「地球おひとりさん」という概念を紹介された。地球をスイカを割るようにして現在の人口の数だけ切っていくと、ひとりあたり、赤道部分でわずか4mmしかないそうである。しかし、ひとりにわけあたえられたものが少ないにもかかわらず、人間がここまで生きてこれたのは、みなぎ協力をしてきたからだと言っている。自らの利益だけではなく地球全体の利益を考えること。声なき被爆樹木の姿から学び、その意義を問いつけること。そのどちらも、自然環境と調和しながら未来を共に創るうえで重要であることを今回のコロキウムからは学ぶことができる。

謝辞

講演者のお二人には、ご多忙の中、大変貴重なご講演をいただいた。開催にあたっては多くの方よりご助言・ご協力をいただいた。大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センターには、運営面において多くのご支援をいただいた。本企画は令和7年度ヒューマン・サイエンス・プロジェクト「人と自然の接点におけるダイバーシティ & インクルージョン」より助成をいただいた。ここに記して深く感謝申し上げる。

注

- 1 活動については、河森正人ほか編『共生学が創る社会』（大阪：大阪大学出版会）2016、および志水宏吉ほか編『共生学宣言』（大阪：大阪大学出版会）2020、大阪大学人間科学研究

科／人間科学部Webサイトをご覧いただきたい。

- 2 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系 Web サイト <http://kyosei.hus.osaka-u.ac.jp/past-colloquium/> (2025/12/15 アクセス) 参照。

参照文献

日本語文献

河森正人ほか編

2016 『共生学が創る社会』 大阪：大阪大学出版会。

志水宏吉ほか編

2020 『共生学宣言』 大阪：大阪大学出版会。

Web サイト

大阪大学人間科学研究科／人間科学部

2025 「共生学科目」 <https://www.hus.osaka-u.ac.jp/ja/undergraduate/sym/> (2025/12/15 アクセス)

大阪大学大学院人間科学研究科共生学系

2025 「過去のコロキウム」 <http://kyosei.hus.osaka-u.ac.jp/past-colloquium/> (2025/12/15 アクセス)